

# 文語の苑

メールマガジン第二十六号(平成二十五年八月)

海つ國のまもりの道

愛國百人一首を讀む(二十一)

千代ふりし書もしるさず海つ國まもりの道は我ひとり見き

林子平

四面海に圍まれた日本、この海の國をどうしたら守れるか、それを論じた書物は千古に亙つて未だに一つもない。獨り私とその答を會得したのだが。

林子平は若くして諸國の識者に學び、蝦夷地即ち北海道にも渡り探險し、初めて「北の守り」に就て考へを巡らし、更に長崎でオランダ人から海外列強の動きを學んで、海防の急務たることを痛感して、寛政四年(一七九二)「三國通覽圖說」、「海國兵談」の二書を著して、世に「海の守り」を訴へました。掲出の歌は著作の完成に寄せる一種の昂揚感と、その一方で世間の人が一向に見向きもしないのは困ったことだと慨歎してゐます。

二書の内、「海國兵談」は特に有名で、西洋諸國が著々と版圖を擴大し「威力日」に強く、また航海の術に長ず。然るに我が日本國たる周圍みな海にして凡そ江戸日本橋より唐阿蘭陀に至るまで境なしの水路なり。彼れ來らむと欲すれば即ち來る。備へ無くんばあるべからず。」と説いてゐます。

寛政の治で名高い、時の老中松平定信は、しかしその前前年には朱子學を以て正學とし、その他を異學として禁ずるなど文化の統制を専らにし、この場合も出版の翌月には早くも「奇怪なる異説を唱へ」と斷罪して書物と版木を沒收し、子平を仙臺は兄友諒の許へ蟄居を命じます。失意の子平は

親もなし 妻なし 子なし 版木なし 金も無ければ 死にたくもなし

と詠じて、翌年五十六歳で生涯を了へました。

しかし天下の形勢は急展開を見せ、既に「海國兵談」出版の五箇月後にはアダム・ラスクマンが漂流した日本人黒屋光大夫らを送りがてら、ロシアとの通商を要求して來るなど外國船對策が急がれ、定信も同年江戸灣防備強化を唱へ、江戸と蝦夷地を防衛重點地域とし、定信を引繼いだ松平信明も最上徳内、近藤重藏、間宮林藏らに命じて蝦夷地調査を行はせ、間宮海峡の確定、伊能忠敬の「大日本沿海輿地全圖」の完成など、嘉永六年(一八五三)ペリ來航までの干支一運、文化文政の繁榮を享受します。

結果的には子平の豫想通りの展開となる譯ですが、定信だけでなく、當時の世上一般も關心を示さず、高山彦九郎、蒲生君平と並べて寛政の三奇人と稱しました。「預言者故郷に容れられず」といふ厄言があるやうに、折角具眼の土があつてもそれを活用できない社會、國家、民族はやはり衰頹せざるを得ないのです。

今日我が國は排他的經濟水域を含めて約四五〇萬平方キロメートルといふ世界第六位の海域を占めますが、之を守りきるにはそれなりの智慧と覺悟が求められてゐます。

市川浩

# 文語の苑

メールマガジン第二十六号

## 文語唱歌「清少納言」

維新直後の明治四年岩倉使節團渡米するも、その折むくつけき男どもに混じりて五人の少女同行して留學生となる。明治八年には東京女子師範學校開校さすなど、明治政府は女子の教育に肩持ちせり。當時の歐米、一見女性優位のごとくに思はれたれど、明治三十一年に始めて渡米せる『武士の娘』杉本鉞子の觀察によれば、家庭の財政は夫に握られ、妻は買ひ物も寄付も皆夫の同意を必要とせるため、アルバイトの小遣ひ稼ぎ、夫の知らぬ間にその財布より金をぬきとるなど、一家の支出を司りをりし日本の女性よりはるかに生活は厳しきものなりしとか。唱歌からもその傾向伺はれ、「三才女」は既に紹介せしことなれど、そが前にすでに「才女」なる唱歌ありき。多彩に活躍せる佳人ばかりにて、明治政府の、女性教育向上を望みしことの一環ならむ。

才女（作詞者未詳。曲は、スコットランド民謡「アニー・ローリー」を用う）

書き流せる筆の文（あや）に 染めし紫 世々褪（あ）せず

ゆかりの色 詞（ことば）の花 類（たぐひ）もあらしその勲（いさ）を（

巻き上げたる 小簾（をす）の隙（ひま）に 君の心も白雪や

蘆山（ろさん）の峯 遺愛（ゐあい）の鐘 眼に見る如きその風情

一讀、ここなる「才女」が紫式部と清少納言なること判然たり。蘆山は後出の香爐峯に同じ。かくて、「三才女」と合せて五名の才女、子供の口の端にのぼることとなりたり。更に昭和に入りて「清少納言」なる一才女のみ唱歌現はる。

清少納言（高等小学唱歌）

一、香爐峯（かづろほう）の 雪はいかにと のたまわす きさきの宮の み言葉に、  
御簾（みす）をかかけて、才學の 高きほまれを のこしたり。

二、枕草子 をりにふれつつ 書きつけし、詩興の筆の 新しく、  
いろもにほひ（匂ひ）も ならびなき、高きほまれを 傳へたり。

三、歌に名ある 元輔（きよはらのもとすけ）の子と 生まれ来て、歌こそ詠まね、  
俊才の中にまじりて、いやさらに 高きほまれは 輝きぬ。

谷田貝常夫

# 文語の苑

カトリックの祈祷文

メールマガジン第二十六号

カトリックの各種祈祷文は、戦前は全て文語文でしたが、現在では、みんな口語文に置き換えられてゐます。

私には、口語の祈祷文は、神や聖母にタメ口で語りかけてゐるやうに思へるのです。

知己の信者が、「『マリアへの祈り』(文語の「天使祝詞」の口語版)は、聖母に対する侮辱だ」と言つてゐましたが、その気持、本当によく解ります。

万葉集の高市皇子を悼む柿本人麻呂の長歌のやうに、詩の大きな役割の一つは、高貴な存在に対して、讚美の言葉を捧げることでした。

それが民主的でないからいけないといふのは「教条的民主主義」です。神を人間の上に置くのは民主的でないと云ふのと大差ありません。

文語は散文であつてもリズムがあり、おのづから韻文の趣を備へてゐます。日常の会話で使ふ言葉とは異なるがゆゑに、斬新な響きを持つことができるのです。

神を崇め、聖母を讃へるためには、極めて適切な言語ではないでせうか。

美辞麗句は心がこもつてゐないから偽善だ、といふ理由で文語に反対する人もゐます。日常語で神や聖母に語りかければよい。詩や文語にする必要を認めないと言ふのです。

聖母像の前に花束を捧げるのは、形式的で心がこもつてゐないと誹謗するのと同じです。

聖母を尊崇する気持があれば、花束くらゐ捧げたくなるものだと思ふのですが、日常語と違ふ言語だからこそ、引き締つた氣持で祈りを捧げることができるのではないでせうか。

文語の祈祷文は、戦後もなほ、隠れキリシタンのやうに、弾圧を受けながら生き残つてゐますが、今、私案として、「使徒信条」「主祷文」「天使祝詞」について、新しい文語訳を作つてみました。韻律を第一に考へました。

「斯くの如くにて候」は「アーメン」の訳のつもりです。

## 使徒信条

天地を創り給ひし天主を讃へ奉る

万世を見そはなす天主を讃へ奉る

かつ天主のただ一人なる御子イエズス・キリストを寿ぎ奉る

イエズスは聖霊の然らしむる所に拠りて、

乙女マリヤより生れ給ひぬ

ポンテオ・ピラトの下にて苦しみを受け、

十字架の上に息絶え、黄泉へ下らせ給ふ

然而、三日にして甦り、天に昇らせ給へり

彼処にて御父の右の方におはしませど、

末の日には再び濁世に降り來たり給ふべし

すなはち、生けると死せると、悉皆人を裁き給はんがためなり

茲に父と子を仰ぎ奉り、数ならぬ身の胸のうちを申し立て仕る

また生命を与ふる聖霊と世に類ひなき教会とを恃み奉る

預言者の言の葉、罪の赦免、つゆ疑ひなかるべし

願はくは、いつれの日に神の御前に召され

# 文語の苑

メールマガジン第二十六号

永遠とこよに生なくる歡よろこびに与あづからんことを  
斯ごとくの如ごとくにて候

## 主祷文

ああ御父  
天津御空にまします御父  
尊き御名の讚へられ給ふべし  
世を治せ給はん日の來るべし  
天津御空には御志の全うせられてあり  
人の世の濁れるにも御志を全うせさせ給へ  
今日我を飢えさせ給ふなかれ  
願はくは我が罪の赦されんことを  
我もまた仇を赦し侍らん  
下僕をして試煉を免れしめ給へ  
悪に引かるることなからしめ給へ

## 天使祝詞

天主の恩愛格別にましますマリヤ  
下僕我畏みて寿ぎ奉る  
御身は女の身にして天津御空の高きを窮め  
御身のうちなる嬰兒も天主之をいとほしみ給ふ  
天主は永久に御身と俱にまします  
神の御母 諱はマリヤ  
願はくは数ならぬ身を御許に引き給へ  
罪に塗るる下僕額つきて乞ひ奉る  
今日我が為に祈らせ給へ  
我が世を去らん日にも祈らせ給へかし

高田友

# 文語の苑

メールマガジン第二十六号

## 巴里の二つ星レストラン(二)

### LASSERRE(ラセル)

八区。巴里にて最も豪華なるレストランの一つなること間違ひ無し。永らく(一九六二年より一九八二年まで)三ツ星レストランなりき。客當りの給仕数多く、サービスの質過剰なる程に高し。天井の開く仕掛け楽しく、換気を兼ねぬ。テーブル上の動物の置物、それぞれ異なる。赤ワインはクリスタルのガラスの器に移すことを原則とす。有名料理なる「鴨のオレンジ煮」、確かに鴨とオレンジの相性頗る良しと覚ゆ。此の料理、給仕の座席近くにて調理するは興味深しとは雖も、他の客にとりては、料理の匂ひの強烈なること迷惑千方なる話。なほ、帰り際に百円ライターを呉る悪習之あり。

### L'ESPADON(エスパドン)

一区。エル・ファイド氏の所有する名門ホテル・リッツのレストランなり。ガイド書のゴエミヨによれば、世界一のサービスを期待し得る場所とぞ。一品料理のうち、「フォアグラのラビオリ」は推奨に値す。

### DUQUESNOY(デュケノワ)

七区。昼の二百五十フランの定食はチーズも込みなれば手頃なり。客層極めて上品にしてサービスも優雅なりき。

### LE PRE CATELAN(プレキャトラン)

十六区。ブローニユの森の中にあり、季節良ければ景色は申し分なし。客のステイタスの高きほど映ゆる店なり。印象に残れる料理は、ガスパチヨ、フォアグラ・シヨ、鳩肉。夏には庭にての食事も亦愉し。なほ、キール・ロワイヤル(カシスとシャンパンを混ぜたる食前酒)に蜂の何度も飛び込み来れるには閉口す。カシスは蜂の大好物なりと判明したる次第。

### LE GRAND VEFOUR(グラン・ヴェフル)

一区。かつてはレイモン・オリヴィエ氏の下にて巴里最高のレストランとして三十年間三ツ星に君臨せしとぞ。一七六〇年にカフェとして創業したる歴史を有す。内装は絢爛豪華にて、ナポレオン、ユーゴー等も客なりき。過激派の爆破により被害を受けたることもある由。バニラ・アイスクリームは格別の味。昼食を除き値段は高過ぎの感否めず。

### LE DIVEILLEC(ディヴェレック)

七区。ヨットクラブの雰囲気有する店なり。魚料理は巴里一番との定評こそあれ、総じて値段は高目なり。海の幸の盛り合はせは二人前にて五百フラン。真偽の程は定かならざれど、この店の火の通りたる牡蠣を食して肝炎になりたる日本人駐在員が居る由。

### LAURENT(ローラン)

八区。ネクタイをせぬ客、服装を注意せられたること屢あり。値段はかなり高し。料理の質は飛び切りのものには非ざれど、ガラス窓よりの風景は格別に麗し。トマトスープ、ミルクフィユなど印象に残る。

# 文語の苑

メールマガジン第二十六号

LE TASTEVIN (タステヴァン)

郊外に立地す。この店を巴里一とする駐在員もあれど、レストランの評価は雰囲気に左右せられ易きものとつくづく思ふ次第。

LES TROIS MARCHES (トワマルシェ)

ヴェルサイユのトリアノン宮殿に立地。オマールの定食四九五フランは大いに推奨に価す。ビスク・ド・オマールといふスープは格別。大蒜、ミント、オリヴなど十四種類の野菜の入るオマールのサラダ、焼きオマールも立派といふ外なし。更に手押し車に載せられたるチーズの種類の多さ、巨大さは他のレストランを遙かに凌ぎ、目を瞠るべきものなり。

JAQUES CAGNA (ジャック・カーニャ)

六区。仏蘭西人の間の評価高し。古き木の梁は田舎家風にて十七世紀の様式とかや。或る時は昼食の突出し、お粗末なるフォアグラの油に過ぎず。

CHIBERTA (シベルタ)

八区。九二年三月に二つ星に昇格したる凱旋門近くの店なり。上り調子の店と覚ゆ。

GOMARD PRUNIER (グーメール・プルニエ)

一区。朝三時にランジスの市場に出掛け最も良き舌平目等を確保する由。九三年三月に二つ星に昇格。魚に詳しく日本人の舌よりすれば左程には非ざれど。

GERARD BESSON (ジェラルル・ベッソン)

一区。人によりては高き評価。仕事場に近ければ、屢訪ひき。稍地味なれど、其れなりの安定感こそあれ。

DUC D'ENGHIEN (アンギャン)

郊外に立地。一度のみ訪れしが、巴里市内の二つ星より幾分落つかとの印象を持って。その代り周辺の景色は格別に素晴らしく、観光客多し。

土屋博

# 文語の苑

メールマガジン第二十六号

沖縄サミット騒動

二 年夏宮崎において外相会合、沖縄にて首脳会合開催せられき。昨年若くしてこの世を去りし日本一の通訳と呼び名も高き横田謙さんはじめとする二十数名の外国人を含む通訳者の担当者としてこの会議に携はれり。沖縄にて首脳会合行はれ、吾万国津梁館に配置されき。我が宿泊したるホテルは英国のブレア首相以下英国政府関係者宿泊先にて、ブレア首相の姿頻繁に見たれば、首相になりてなほ日浅きブレアはいとハンサムにて、勢ひも輝きも備へたる英傑なりと記憶したり。次にオーライみじかりしはブーチン大統領なり。クリントン大統領任期も終はり近く、すでに輝きは薄れたりき。そもそ人間、勢ひあるときには、パワーあり、エネルギーあり。自づから輝き出づるものなりと感じ入つたる次第なりき。各国首脳万国津梁館にそれぞれの車列にて到着したるが、アメリカはいと大きな救急車併走するあり。その車輛の中にて手術することを得、たゞ重なる暗殺行為ある国なればの事なりと思ひき。大統領専用機 Airforce 1 は嘉手納基地に駐機したり。サミットはお祭り騒ぎとともに何事もなく無事終はりしかば、成功と言ふを得んと思ひきや、その後始末いみじかりき。この会議に係る政府関係者のスキャンダル露呈せり。

翌年の六月のある日、我社に東京国税局職員来訪せり。吾は仰天し、恐る恐る何か不祥事ありやと問ひしに、「貴社の検査にあらざれば、せひご協力を」と返事あり。サミットに係る見積書、請求書、関係領収証、通帳等提示せよとの指示。この仕事長野の冬季オリンピックより繋がれば、その当時の関係請求書なども提示せよとのことなりき。何もやましきことはなければ胸の動悸高まりて已まず。一時間くらゐで帰れど、実際に「近々警視庁よりも連絡あらん」と言葉残し立ち去りき。一週間後、警視庁よりサミット関係ファイルや手帳など持参のうへ、出頭すべく命ぜられ、お堀端の警視庁へ出向きたり。テレビドラマにて観劇せし聴取室すらりと並び、その一室に通され、外務省の調査を進めたるによりて、御協力を願ふと二人の刑事らしき人たちより質問攻めに遭ひたりき。また吾知らぬ事実など時折提示し、我が反応を観察せり。例へば、ある業者よりサミット準備室長に秘書提供せられたるに、そは銀座のホステスなりし等なり。確かに派手なる秘書と吾思ひし記憶あり。色々分りしがそのひとつは吾外務省関係者なりしかば、わが社のみ袖の下を要求せられざりき、といふ事実あり。二時間にもおよぶ聴取行はれ、後日その記録点検し、確認のサインをせよといふ。部屋を出づる際に向かひ側より横田さん出でてきたり。目あひしところで、突然近くの別の部屋に誘導せられ、五分ほどして刑事廊下にたれも通行するなきを確認し、玄関まで案内せられき。後日その記録整ひしかば、また警視庁に出向けといふ。記録を読みたれば、言ふにあらざりしこと書きてありしかば、赤ペンを出して訂正したれば、「えっ訂正するの」と言はれたり。事実と違へばと言ひ放ち、訂正印まで押したりき。後に朝日新聞の友人たちに話したれば、普通は訂正すること能はずと言はれたりき。当時は呆きるばかりの話と思ひしかども、をかきき経験をしたりと今は思ひてあり。

赤谷慶子

# 文語の苑

メールマガジン第二十六号

## ラダック紀行（其之二）

レーに着きし夜、同室の先輩ヨガマット、双眼鏡を持ちて、「星をば見ん」と小生を誘ひぬ。小生も用意したる防寒着<sup>ダウンジャケット</sup>を羽織りホテルの廣きベランダに出でぬ。

星の数、横濱の我家にて見ゆる十倍なり。レー随一のホテルなれば、建物明るく周囲に街燈多し。星の観測には障碍なり。されど、星までの距離、手を伸ばせ届くにあらずやと思はるる也。「あの星を取つて呉れると泣く子かな。」電燈の発明以前は、星は斯くも近きものなりしか。北斗七星美し。天文知識の不足を嘆きぬ。

先輩はマット上で瞑想に入りぬ。妨げとならんことを恐れ静かに引上げぬ。

翌日、ウレトクポの宿。同室者、我に遅れて帰室、「星、見事なり」とぞ云ふ。二人して外に出でぬ。「街道まで行かん。」

ホテルの門、既に閉ざされたれども、門番氏、笑顔にて開錠開門す。

「何と・・・」横濱の百倍、千倍の星と云はんとも誇張に非ず。高解像力の天體寫眞目前に有るが如し。夜空の白く輝きたる、真に星月夜とは斯くの如きを言ふなり。暫く見惚れたるも、門番氏を長らく待たせんも心苦しく、心は後に残れども、思い切りをつけざるを得ざりしなり。

余、嘗て蒙古<sup>モンゴル</sup>訪ねし折、司馬遼太郎の「モンゴル紀行」讀みて、彼の地の星空を常々憧憬してありき。されど訪れし当日は月夜にて、月真に美しけれど星見えず。今宵ウレトクポにて遂に憧れの星空を見るを得つ。

仲紀久郎